

# 子宮頸がんワクチン副反応 連絡会きょう発足

## 被害者、10代が大半

子宮頸がんワクチンの接種に伴い、重い副反応が出たとする被害者や親同士が手をつなぐことになった。25日に発足する「全国子宮頸がんワクチン被害者連絡会」(042・594・1

337)。中高生ら10代が被害者の大半を占め、事務局長の日野市議、池田利恵さんらのもとには各地から相談が寄せられている。

子宮頸がんワクチン「サーバリックス」は3回の接種が必要。三多摩地区の中3生(15)は、母親(44)によると、2011年5月の1回目の接種から1週間ほど後、右足首が痛むようになった。6月に2回目接種後は激しい痛みが脇腹や背中、ふくらはぎなどあちこちに起きるようになり、体

育の授業に出られず登校にも支障が出た。検査を重ねたが異常は見つからず、医師からは「きつかけはワクチンだが因果関係の解明は難しい」などと言われたという。

11年12月には、現在かかっている小児科医が、サーバリックスがきつかけの「難治性疼痛」と厚生労働省に報告した。

富山県の中3生(15)も、中2だった12年2月に3回目を接種した後に激しい痛みが起きた。血液検査はす

べて正常だが、8月に歩行困難になり、今も1日の大半を寝て過ごしている。接種した産婦人科医が今月、厚労省に、サーバリックスの副反応として届け出た。このほかにも八王子市、練馬区、山形県、三重県、長崎県などから同様の相談が集まっている。

(斎藤智子)

13. 3. 25  
朝 日